報告

平成20年度
北海道小児救急地域医師研修会

常任理事・救急医療部長　目　黒　順　一

本年度の小児救急地域医師研修会を、9月28日の北見を皮切りに2月1日の札幌まで道内8カ所で開催した。

開催地医師会、講師、共催の北海道小児科医会、その他関係者に誌上より厚く御礼申し上げる。

この事業は、近年の少子化・核家族化と女性の社会進出に伴う保護者の子育てに関する知識不足などで小児の時間外診療が増加、本来重症患者の診療にあたるべき二次救急医療機関に軽症患者が集中し、小児科医師が疲弊するなど小児救急医療体制に深刻な影響を与えていることから、その負担軽減をはかる目的で平成17年度から北海道より委託を受けて実施している。

当初は医師のみを対象としていたが、昨年度からは、小児に接する機会の多い方々にも参考としていただくよう看護師、保健師、救急隊等医療関係者、さらに本年度からは臨床研修医の参加も得ている。

本年度502名、累計では1,430名の総参加者数で、参加医師には、北海道知事・北海道小児科医会長・北海道医師会長３者連名の修了証を交付している。

研修会は、北海道小児科医会において作成された145枚のパワーポイントスライドをベースに、各会場2名の講師のオリジナルを加えての講演2時間と質疑応答を行った。

スライドは、発熱、熱性痙攣、インフルエンザ(脳症)、麻疹、急性胃腸炎（ロタ、ノロウィルス)、腸重積、イレウス、脱水症、喘息など日常よく見られる疾患から、ヘノッホ･シェーンライン紫斑病などの稀な疾病等についても具体的な症例を豊富な写真で示されたもので、講師からは、これらの発症機序や診断･治療のポイントについて、また誤飲、救急対応、虐待についても詳細に説明され、明日からの診療にすぐに役立つ内容であった。受講者には毎回アンケートをお願いしているが、その回答にも、大変勉強になったとの声が多い。

資料としては、スライド印刷の他、別掲の①小児初期救急診療ガイドブック、②小児救急マニュアル2冊、③道内小児救急医療体制の概要、④啓発用パンフレット３種、を配付した。④のパンフレットは余部があるので、ご希望の方は、北海道医師会事業第二課（011-231-1725）までご連絡いただきたい。なお、北海道医師会ホームページからダウンロードもできるのでご利用願いたい。

この研修会は21年度も引き続き開催予定である。多数のご参加をお願い申し上げ報告を終える。

①　小児初期救急診療ガイドブック内容
（厚労省：Ａ４版105頁）

第１章　症候と疾患
　Ⅰ　全身の症候と疾患
　　1　不機嫌　2　発熱　3　脱水
　　4　浮腫　5　アナフィラキシー
　　6　インフルエンザ

　Ⅱ　皮膚の症候
　　1　発疹　2　紫斑・出血傾向
　　3　じんましん

　Ⅲ　痛みの訴え
　　1　頭痛　2　耳の痛み
　　3　顔面・頸部の腫れと痛み
　　4　胸痛　5　腹痛
　　6　そけい部の腫れと痛み
　　7　尿路の痛み　8　四肢の痛み

　Ⅳ　呼吸器系の症候と疾患
　　1　せき　2　喘鳴・呼吸困難
　　3　クループ症候群　4　肺炎
　　5　気管支喘息発作　6鼻出血

　Ⅴ　消化器系の症候と疾患
　　1　悪心・嘔吐　2　下痢　3　血便
　　4　便秘　5　急性腸炎

　Ⅵ　神経系の症候
　　1　けいれん　2　意識障害

　Ⅶ　事故・外傷・その他
　　1　誤飲・誤嚥　2　熱傷　3　頭部外傷
　　4　骨折・脱臼　5　動物咬傷・昆虫刺傷
　　6　溺水　7　尿の異常

第２章　小児初期救急における留意事項
　1　虐待を疑う症候と疑ったときの対応
　2　高次医療機関との連携
　3　診断・治療に必要なこと
　　1）初期救急における検査方法・手技
　　2）治療手技
　　3）頻用薬品・備品
　　4）モニタリング

②－１　小児救急マニュアル［１］内容
（北海道小児科医会：Ａ４版30頁）

1	発熱	2	咳嗽・喘鳴	3	下痢・脱水症
4	嘔吐	5	腹痛	6	痙攣・意識障害
7	鼻汁・鼻閉・鼻出血	8	誤飲		
9	発疹・かゆみ	10	不機嫌・なきやまない		
11	外傷・熱傷	12	予防接種の副反応		
13	くすりとその飲ませ方				

②－２　小児救急マニュアル［２］内容
（北海道小児科医会：Ａ４版35頁）

Ⅰ.小児の救急蘇生とショック
　1.心肺蘇生　2.ショック　3.救急蘇生薬
Ⅱ.小児救急外来における頻用薬剤使用法
　1.処方時の留意事項　2.小児救急蘇生薬
　3.小児のけいれん・意識障害
　4.気管支喘息の治療薬
　5.小児救急における抗菌薬・抗ウイルス薬
　6.解熱薬　7.解毒薬
　8.小児救急の薬物治療に関する参考文献

講　師（研修会開催順）

立花幸晃	網走厚生病院小児科医長
三河　誠	北見赤十字病院副院長
永島哲郎	釧路赤十字病院副院長
池本　亘	市立釧路総合病院小児科医長
松本憲則	帯広厚生病院小児科第一主任部長
青柳勇人	帯広協会病院小児科主任医長
東海林黎吉	市立室蘭総合病院副院長
小野　暁	日鋼記念病院小児科科長
室野晃一	名寄市立総合病院診療部長
小西貴幸	市立旭川病院小児科診療部長
永田　康	市立美唄病院副院長
佐藤俊哉	岩見沢市立総合病院小児科医長
遠藤満智子	函館五稜郭病院小児科診療部長
依田弥奈子	市立函館病院小児科科長
高橋　豊	KKR札幌医療センター副院長
森　俊彦	NTT東日本札幌病院小児科部長

〈参　考〉

医師数

	平成６年	平成８年	平成10年	平成12年	平成14年	平成16年	平成18年	増減率 H6→H18	増減人数 H6→H18
道内の医師総数	10,249	10,656	10,990	11,540	11,898	12,201	11,579	113.0%	1,330
小児科診療を行う医師数(複数回答)	1,442	1,468	1,377	1,322	1,278	1,190	1,117	77.5%	▲325
小児科を主たる診療科とする医師数	572	600	603	590	608	598	604	105.6%	32
主たる診療科とする医師の割合	39.7%	40.9%	43.8%	44.6%	47.6%	50.3%	54.1%	－	－

各圏域における現状と重点化病院

	小児科標榜病院	小児科専門医師	小児人口	重点化病院
南渡島	13病院	48人	6万1千人	・函館中央病院
南檜山	３病院	1人		・市立函館病院
北渡島檜山	６病院	7人		
札幌	41病院	269人	29万6千人	病院、小児科医師数ともに充足しており、必要性が低いことから重点化病院は選定しない。
後志	８病院	29人	2万8千人	・北海道社会事業協会小樽病院
南空知	９病院	13人	2万3千人	・岩見沢市立総合病院
中空知	６病院	9人	1万5千人	・砂川市立病院
西胆振	８病院	19人	2万5千人	・日鋼記念病院 ・市立室蘭総合病院
東胆振	８病院	20人	4万1千人	・苫小牧市立病院
日高	６病院	4人		・王子総合病院
北空知	３病院	5人	7万人	・深川市立病院
上川中部	12病院	75人		・市立旭川病院
富良野	３病院	4人		・旭川厚生病院
留萌	６病院	2人		・北海道社会事業協会富良野病院
上川北部	５病院	7人	9千人	・名寄市立総合病院
宗谷	６病院	5人	1万人	・市立稚内病院
北網	６病院	19人	4万2千人	・北見赤十字病院
遠紋	８病院	8人		・遠軽厚生病院
十勝	14病院	27人	5万人	・帯広厚生病院 ・北海道社会事業協会帯広病院
釧路	９病院	21人	4万8千人	・釧路赤十字病院
根室	３病院	6人		・市立釧路総合病院

※　道保健福祉部資料より